

椿姫の侍せ

しあわ

<中>

白頭巾



椿姫の侍せ^{しあわ}
＜中＞



椿姫の倅せ 目次

△上巻▽

1 陰気な来訪者

2 老眼鏡

3 二人の姉様

△中巻▽

4 野良犬と黒猫

5 業ごう
ちんにゆうしや 1 0 3

6 闖入者
ちんにゆうしや 1 4 6

以下続刊

7 開拓地のいちばん長い日

8 古い怨声

9 「」

後書 羊群の中で

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などに関係はありません。

今日では差別的で不適切とされる語句や表現がありますが、時代背景の再現のためそのままにしています。

6 章 172P に性暴力被害に関する表現があります、フラッシュバック等心配な方は注意してご覧頂くか、173P まで飛ばしていただいても内容に差し支えありません。

4 野良犬と黒猫

砂礫されきの吹き荒ぶ暁の地平線に、2頭の馬ぎようこうが駆けていく。

彼女たちの後ろでは、登り始めた暁光ぎようこうと対をなすように家屋が赫灼かくしゃくと燃え盛っていた。

「証拠を持ち帰らなくて良いのかい」

ワーカホリック

「平気よ、この郡の保安官は仕事中毒だもの。きっかり調べて、明日には新聞に結果が載るわ。それで証拠になるでしょう…あんたはまた矢を残してきたのね」

「ああ、忘れるところだった」

彼らの言葉で『白雪』という名前の彼女は馬上で振り返ると、矢をつがえて弓を引き絞った。八十ヤードは離れていたが、矢は見事に家畜囲いへ突き刺さった。

「お見事、なかなかよ」

一方の『淑女』は、きやつきやと手を叩いて褒め称えた。キャンディーの包み紙のような派手なドレスも平気で着こなす彼女は、どこかの娼婦か愛人かだったのだろうと思うのだが、『白雪』は深く詮索しなかった。

『淑女』は元々『名無し^{レディ・アップ}の淑女』だったのが省略された結果である。髪を染め変え、化粧で生娘から老婆にまで自在に化けて見せた上、変えようの無いその虹彩は角度によってグレーにも薄青にも見える不思議なハシバミ色をしていたから、誰も彼女の正確な描写ができないのであった。もっとも保安官たちの口吻を借りれば『淑女』などではなく、総じてクソアマというのが彼女の実態であった。

一方の『白雪』も同様の人種であったが、こちらは先住民の黒々とした髪を背に流し、やはり彼らの伝統的な革の衣類を纏^{まと}っていた。今日はだぶだぶとした男物のズボンを履いていたが、白人たちが彼らにさして興味を持たないのを良いことに、男になったり女になったり、あるいは子供から年寄りまで着物を変えるだけで捜査を混乱させるのだった。

退屈そうな伸びと共に、彼女の黒い眼が細められる。

「動かない的なんぎ、面白かないよ」

「少しでも動くあっちを狙えば」

そう笑いながら、逆方向へ蹙^{いざ}っていく丸い背中を指した。

「よしなよ、あんたが助けようって言ったんじゃないか」

彼女は囁くように付け加えた。

「白人のお仲間だろう？」

「私は白人が嫌いだもの：でも本気で狙えと言ったわけじゃないわ」

『淑女』は苛立ちを隠すように首の後ろをガリガリとやってから、『白雪』へ据わった目を向けたから、彼女はおどけて肩をすくめて見せた。

「まさに悪女の深情けてやつかい」

「まさか！」

『淑女』の鈴のような笑い声と共に、ふたりは朝日の内に消えていった。

初夏の眩まばゆきの中、その栗毛をきらきらと輝かせ、若い牝馬は機嫌よく踊るような足取りで緩ゆるい丘陵を進んでいた。

「私の心がわかるの、お前は」

馬上の主人が緑の目を伏して問いかけるが、もちろん答えは無く、彼女はふんふんと首を振りながら下草を踏むばかりである。

「お前の無妄むぼうには救われるよ、カメリア」

ドクター・ルイ・マーティンは鬱屈うっくつした気分をどうにかしようと、ひとりで朝駆けに出ていたのであった。

夏は近いものの、からりと晴れた早朝の空気が頬を心地よく撫でていく。恩師から診療所を引き継いだこの町医者を目下の悩みは、数日前に収容された患者のことであった。もちろん、その際に彼の家族の司法解剖を命じられたことも、マーティンの心に重く影を落としていた。

焼死体を検案するのは、どんなに経験のある医者でも気分の良い仕事ではない。それに加えて、彼らの死因は火災などでは無かった。先に殺され

た上で、火を掛けられたのだ。焼けて屈曲した損傷の酷い遺体をどうにか腑分けして、マーティンは必死に探った：そして、それぞれに明らかな致命傷を見つけ出したのだった。

ただの物取りと放火ではなく、明確な殺意を持って殺められ火を付けられたことが確定し、そこから先は保安官達へ引き継がれた。

（恨みのある者だけ殺したのか、気まぐれで助けたのか、今となってはわからないが：）

収容された患者は、火事を逃れた通報者でもあった。長期の監禁で足が不自由になっていたが、這うようにして近隣の農場に逃げ込んだ。隣人は彼の背後の大火事で事情を察して、人を呼びにやった。

このような非常時の後では、興奮も酷く発話は不明瞭で意思の疎通も難しい。同居の家族が居なくなってしまうては、既往歴を調べることもできない。

ヨウ素消毒剤の風呂に入れ伸び放題の髪と髭を整えて入院させたが、治

療と言っても専門外のマーティンには徒手空拳に近かった。

（治せるものなら、外科室に何時間も貼り付いた方が余程マシだ）

このような精神疾患は複合的な病因も少なくない。蔵書を漁^{あさ}っても確定的な治療法には至らず、発作のたびに鎮静剤を打つくらいしか手がなかった。

「：戻ろうか」

消沈した気分は変わらなかったが、ぱんぱん、とカメラリアの首筋を叩いてから彼女は町へ馬首を向けた。

その並足の規則正しい動きに合わせ、マーティンの背には黒々した髪で編んだ辮髪^{べんぱつ}が跳ねている。：遠目には中国人労働者のようにも見えるこの

三つ編みは、面倒ごとを避けるのに靦^{てきめん}面であった。

イギリスのジェームズ・バリーあるいはキューバのエンリケータ・ファベス（どちらも男性として活躍した十九世紀の女性医師）のように、このマーティンもすっかり男のふりをして、町の診療所に収まっているのだっ

た。

訳あって先住民の実父にも中国人街の養父母にも息子のよう^に育てられたものの、成人後どうにも髪だけは切る気になれず、編み下ろしている。これで奇人と思われるのも、人間嫌いのマーティンには都合が良かったし、そもそも彼女はよく知っていた。

白人の連中ときたら、自分のような混血や清国人が何をしているかなんて全く興味がないことを。

∴この彼、ただひとりを除いては。

その男は馬小屋で立ち尽くしていた。

ゴルディ・カー

『金色の野良犬』の異名通り、髪油程度ではまとまらない乱れ放題の煤すすけた金髪には、物憂げなコバルトブルーの瞳が沈んでいる。

郡保安官ベンジャミン・ネイサン・ウィルキンスは五十がらみの長身の男で、何もかもがマーティンとは対照的であった。